

人の生命と尊厳を守り健やかな心身を育む教育 心と体のすこやかな成長を図る食育・健康教育の推進

I はじめに

子供たちが心身共に健やかに成長をする上で基本になるのは適度・適切な運動や正しい食事の摂取であることは言うまでもない。

しかし、今日、社会環境や生活様式の変化により、児童の健康面や安全面において多くの課題が指摘されている。このような状況において子供たちに対する食育や健康教育は、心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性をはぐくんでいく上でも益々重要になっている。

そこで、本研究会では、「心と体のすこやかな成長を図る食育・健康教育の推進」を図るための組織的・体系的な食育と健康教育の方策の研究を校長の学校経営の立場から深めてきた。

II 研究の概要

本研究会では、昨年から各校からの実践発表を中心に研究を進めてきた。食育の面では、発達段階に応じた食育指導目標の設定、各教科と食育の関わりの明確化、「早寝、早起き、朝ごはん」運動、保護者の給食試食会の開催、児童会・給食委員会活動の推進などの実践例が示された。また健康面では、業前・業間体育の取り組みとしてのなわとび運動や体操、歯みがき運動、肥満改善等に向けた児童の体位分析、生活リズムのチェックなどの実践例が示された。

特に、食物アレルギーへの対応については、いずれの学校でも実践がなされており、アレルギー疾患の児童生徒が増えている今日において、重要な課題としてとらえ適切な対応が必要不可欠と意見集約された。そこで本部会においては、学校給食における食物アレルギー対応について、管理職としてどのような指導が求められるのか、またどのような対応が必要かなどについて学習をし、研究を深めることを目的とした。

1 食物アレルギーの実態及び教職員の意識

(1) 山梨市内小中学校の食物アレルギーの状況（平成30年度給食センター開設に係る調査より ※現中学3年生を除く）

◆管理指導表に基づき給食等の対応をしている児童生徒数

71名 小学校 62名・中学校 9名

◆飲み薬を学校に持参している児童生徒数

30名 小学校 26名・中学校 4名

◆エピペンを学校に持参している児童生徒数

11名 小学校 9名・中学校 2名

2 山梨市内小中学校教職員が食物アレルギー対応に関して、日頃感じていること

「注意していること，気をつけた方がよいこと」

- ◇ 情報共有と共通理解
- ◇ 協力体制や役割分担
- ◇ 緊急時の対応（素早く・正確に・複数で）
- ◇ 保護者との連携（個々の家庭との関係構築）
- ◇ 研修（定期的に，実践的な）
- ◇ 給食指導（献立チェックや配膳等，誤食防止）
- ◇ 校外学習での配慮
- ◇ 本人や周囲の児童への指導（正しい理解や思いやり，異変時の対応）

「心配なこと，知りたいこと」

- ◇ 研修会の実施（定期的に，実践的な，症状などの理解，エピペンの使い方）
- ◇ 校内体制（協力体制，緊急対応）
- ◇ 既往がない児童が発症した際の対応
- ◇ 給食以外の授業での配慮
- ◇ 給食の対応（国や県のマニュアルや学校間での対応の違い）
- ◇ 児童への保健指導

Ⅲ 成果と課題

アレルギー対応の基本は，正確な情報の把握とその共有である。児童生徒の状態について，医師の診断を踏まえて正確に把握すること，事故につながるリスクについての情報を収集すること，日常からの情報把握が重要である。そのためにも，校内での情報の共有及び保護者との連携は必要不可欠である。正確な情報の共有は，食物アレルギーの児童生徒の命を守るとともに，教職員の不安や負担の軽減にもつながるものと考えられる。同時に学校が今，出来ること，出来ないこと，努力すれば出来ること，出来ないことを明確に区別しておくことも必要である。「あの学校では・・・，この学校では・・・」の違いは良くない。市単位などのまとまりの中で同じ対応が準備されることが重要である。山梨市では，学校給食運営協議会を立ち上げており，「山梨市学校給食食物アレルギー対応マニュアル」についても検討が進められている。今後本マニュアルを参考に，必要な情報の把握や共有に一層務めたい。

事故予防の視点では，給食の各段階における工程をチェックし，事故リスクを評価，そして更なる予防策を検討する等の対応が求められる。万が一事故が発生してしまった時は迅速な対応が必要であり，実際に対応訓練を行った学校の報告を共有することが出来たことは大変有意義であった。一方，平成30年8月の山梨市給食センター稼働により，今まで各学校単位で行っていたきめ細かな対応が出来なくなることが分かってきた。そこで，施設運営者である市教育委員会と学校，そして保護者が情報共有を深め，事故のない安全な給食を提供していくための最善の方策の検討と実践が喫緊の課題である。

（部長 廣瀬 芳樹）